

# Jugendberatung und Jugendhilfe e.V.

(仮訳：社団法人

青少年健全育成・薬物被害者救援支援センター)

(青少年健全育成政策)

平成20年2月6日(水)

[面談者]

バース氏(団体代表)

マズアー博士

[通訳]

ヴォルフ・ディーター・ハール氏



○説明者 ここは場所的に、一番治安の悪いところにあるセンターです。

さっき、フランクフルト中央駅の前の方、薬物を買う人や使う人がいました。ここは駅に近いので、何か問題があったとき、そういう人たちはここまで来るんですよ。そうすると、ここは緊急センターなので、自殺未遂とか、麻薬の関係で困った問題が起こったときに、ここまで来て、そういう専門家から処置してもらいます。まず、やっぱり第一は、麻薬の使用者のために。そういう人たちはすべての麻薬を使うんですよ。クラック、ヘロイン、コカイン、マリファナ、覚せい剤、すべて毎日飲むんですよ。例えば、クラック、ご存じですか。コカインですよ。そういう人たちですね、必要であれば、30分の間、ここを使ってもいいと。

○中井議員 利用してもいいと。

○説明者 例えば、外だったら命がけですよ。間違ったら、もうおしまいです。だから、この場所を使って、大体30分ここに入って、薬を飲むんです。

普通のコカイン、ご存じですか、クラックは、パイプの中につけるんです。ヘロインより物すごく作用が強いです。上の方、緊急のために宿泊の施設があるんですよ。ベッドの数は22台。夜だけじゃなくて、一日じゅう、朝から夜まで使ってもいいんです。メタドン、聞いたことありますか。麻薬のかわりにメタドンという薬、毎日いただくんですよ、お医者さんところで処方してもらうんです。ヘロインの代わりです。薬物中毒は治らないけれども、禁断症状は比較的軽いんです。それと、自分が外から持ってきたすべての麻薬を使ってもいい。

○池田議員 ここはそのためだけのものですか。



○説明者 これはスモーキングルームです。麻薬の場合はいろいろあり、スモーキング、飲む

のと注射。これはスモークです。

○西議員 なぜ30分なんですか。

○説明者 これは平均的な時間で、普通は5分間かからないけれど、ゆっくりやった方が体にいいということです。

○西議員 ゆっくりの方がショックにならないということですね。



○説明者 こちらは小さな医院です。部屋が2つ、医者は2人が常駐しています。

それで、こちらからかわりのメタドンという薬をいただきます。これは薬です。例えば、ヘロインのかわりに飲んだら同じ状態になりますけれども、ふわふわとした状態じゃなく、犯罪までいかないです。安定剤も入っております。これを使ったら禁断症状がすごく軽くなりますよ。うまくお医者さんの処方で飲んだら治ります。もし、セラピーしながら、長い間強い気持ちを持ち続けたら治ります。こちらには毎日100人の患者さんが、注射の関係でいらっしゃるんです。注射の後、やっぱりセラピストの方もいらっしゃるから、両方ですね、精神的なセラピーと薬です。

フランクフルトの中、今、そのメタドンという薬をもらう人は1,200人います。毎日100人、まちの郊外にも、あるいはほかのところにも、同じようなところがあります。1日1,200人で、とってお金がかかります。そういう人たちは、ドイツの場合ほとんど健康保険に入っているんですよ、お父さんの関係で。今、日本でも入っていない人がふえていくということで社会問題になっていると聞いていますが、1,200人のうち、1,000人が入ってるんですよ。だから、健康保険からお金をいただきます。残りの200人は市が払うんです。

- 中井議員 1, 200人は、フランクフルト市内で1, 200人ということですか。
- 説明者 そうです。
- 池田議員 メタドンは合法ですか。
- 説明者 そうです。けれども、直接買うことはできません。処方せんの関係で。医者に処方してもらって薬局からもらうんです。そうすると、こちらの方でその100人に対して、ちゃんと記録があるんです。それは中毒の程度に対してメタドンの量が変わるじゃないですか。軽いとか。そういう研究に基づいて、毎日メタドンをもらって飲むんです。
- 西議員 その人は注射を全くせずに帰っていくんですか。
- 説明者 やっぱりうまく使ったら、やめられるんですよ。禁断症状が大分少なくなっていけば、メタドンも必要なくなっていきます。
- 西議員 比率を変えていくという、配合を変えると。
- 説明者 もちろん。飲んだらふわふわした感じはしません。だから、職場があれば、仕事ができます。やっぱりそれは1つの大事な段階です。やはりそういう人たちは、ほかのものを使ったり、飲んだらあんまりよくないです。覚せい剤とか、いろいろあるじゃないですか、睡眠薬とか。あれはやっぱりよくないです。尿検査をして、他のものを使っていないか検査するんです。そういう他の薬物を使ったという結果がわかったら、やめてもらいたいという説明をします。もし、やめられなかった場合は強制的に入院させます。病院の中では、スペシャルセラピーがあります。
- 西議員 ここにまず来て、来なかったら入院ですか。
- 説明者 200人の中、30人ぐらい、やっぱり途中でやめてしまいます。
- 西議員 来なかったらどうなるんですか。捕まりますか。
- 説明者 来ることを勧めるとか、そういう方法しかないです。
- 西議員 来なくても自由、問題はないということですか。
- 説明者 もちろんそうです。
- 中井議員 本人が麻薬を使用すること自身が法違反ですか。日本では逮捕されますけども、こちらはどうなんですか。
- 説明者 こちらのフランクフルトでは、そういう人が多いから、割合やさしいです。ミュンヘンは昔から保守的ですすぐ逮捕されます。こちらは、社会民主党、緑の党連立なので、そういう人たちに対してやさしいです。ちょっと使っただけなら逮捕しません。
- ここは処置室です。毎日6時から夜の9時まであいています。ただし水曜日の午後はお休みです。普通は人がいっぱいです。
- 西議員 メタドンを使う人ですか。
- 説明者 いや、全部。好きなものを飲んでいるんですよ、外から入って。
- 西議員 何の麻薬でもいいということですか。



○説明者 何でもいい、好きなものを。

○西議員 それは、外で吸うと危ないからですか。

○説明者 ここであれば、コントロールができるじゃないですか、安全です。例えば、警官がそういう人たち見れば、中に入りなさいということになります。緊急の場合はお医者さんが見てくれる。それでコントロールができる。この中では、お互いに売ることができません。けれども、こちらでは、注射器、スプーンを置いています。



○中井議員 これは何ですか。

○説明者 消毒された注射器です。例えば、お互いに注射器使ったりしたら危ないじゃないですか、エイズの感染者になってしまいます。そうすると、こういう注射のために消毒されたものを安全のためおいておくんですよ。

ここに入ったとき、登録のために名前を言う必要があります。証明書も必要です。16歳からドイツ人は自分の証明書持ってるんです。アンケートもあります。そうすると、1カ月たったら、その人物の履歴がわかります。1年間に登録の関係で7,000人ぐらい来るとです。

ここで働いてる人たちは3人です。ソーシャルワーカーと医学部の学生たちで、ボランティアでなくて報酬が出ます。

これはもともとスイスから入ってきたんです。このことは、ちょっと日本人には考えられないかもしれませんが、私たちはいいことだと考えています。今、全体的にまちの安全性が大分よくなりました。そういうメタドンの関係で安定してるからです。これも1つの問題の解決です。一部だけですけれども。万引き、暴力、売春、けんかが少なくなりました。

#### (会議室)

○説明者 ようこそこちらはJugendberatung und Jugendhilfe e.V. 薬物中毒の方の相談・支援をしています。1975年からの団体です。まちの中、地域の方など、35カ所あります。ここはまちの真ん中にありますが、ほかのものは、まちの郊外にあります。そういう人たちは、ほとんど貧困層だから、ちょっと離れた、下町に住んでいます。そうすると、元気になったとき、1人で生活できないから、アパート借りて、3人、4人一緒に生活しています。元気になったけれども、まだ仕事ができないとき、退院の後、リハビリテーション専門の6台のベッドのあるミニ病院もこちらにあります。

また、エイズにかかった人のためのアパートもございます。そういう人たちは、麻薬とエイズ、両方ですね、そういう人のためのマンション、アパートがあり、指導の方が一緒に住んで、見る人が必ずいます。

また、中毒になった人のために、日本では考えられない専門の学校もございます。小学校、中学校、高校もございます。ドイツの中でそういう専門学校は1カ所しかありません、このフランクフルトのまちの中です。広い意味で、麻薬の関係でそういう病気にかかった人のための事務所、問題の解決のための事務所がこちらです。

麻薬関係で500人が働いている、すごく負担になります。

○中井議員 公務員ですか。

○説明者 ちょっと公務員に近いステータスですけれども、契約職員ということになります。

今、ドイツの場合は公務員の数が大分減ってきました。大体同じだけれども、公務員の場合は、簡単に解雇できない。法律の関係ですね、けれども、契約の関係で、入って10年間たったら、何かあったら解雇できます。

○西議員 皆さんはそういう契約の方ですか。

○説明者 そうです。

○池田議員 ここは、ボランティアの団体として理解したらいいのですか。

○説明者 ほとんどプロの方です。ボランティアの方は別にして、500人のプロの方がいます。

○土師議員 ポリスマンとの差はどこですか。

○説明者 もちろん、関係はありますけれども、警察とは別です。25年前、フランクフルト市の中、麻薬の関りの犯罪率がとても高かったんです。ストリートワーカーご存じですか、現場まで行って路上で、本人と話すんです。

○池田議員 ボランティアですか。

○説明者 ストリートワーカーという資格を持った人です。

例えば、さっきの話、25年前にフランクフルトの真ん中の公園の中、毎日毎日1,000人の人たち、ヨーロッパの中で一番大きなドラッグの場所だったんです。私今でも思い出します。注射だらけでした。

25年前に、治安も悪くなってきたんです。法律、警察、厚生省、政治家たちが一緒に座って、お互いに討論して、それでそういう問題の解決になったんです。そうすると、その段階でさっきのところのスタッフ、ストリートワーカーが生まれたんです。まず、最初の目的は公園からやっぱり家の中に入れる、公園の中はコントロールができないから。これが、基本の最初の段階でした。

そうすると、そういう人たちのために24時間のお医者さんの関係の緊急のサービス、宿泊の施設、お手洗い、シャワー、オールラウンドサービスです。

さっきの中央駅に近くに3件あったんです。向こうの建物はフランクフルト市のものです。そうすると、やっぱり場所が足りないから、だんだんまちの郊外の方、新しいところをつくっていきました。

そうすると、1992年から警察のおかげで、やっとまちの中が安全になりました。例えば、フランクフルト以外の人たちは、強制送還で、もともと住んでいたところの方へ、帰ってしまうじゃないですか、こちらのフランクフルトの中のそういう人たちは、自分の施設のためにそういう指導があったんです。

オランダとスイスの方にすでにそういう法律があったから、向こうの経験を参考に、新しい法律をここにつくって、先ほど1階で見たような場所を設けたんです。さっきの1階のところは1949年に、ドイツではじめてできて、今ドイツ全国で12カ所が、まちの中にそ

ういう施設があります。そうすると、駅の中、夜中に注射を使う人はあんまり見られません。全体的に社会にとって1つのメリットとなります。このことはそういう人たちの健康・健全のためにいいことではないでしょうか。

自分で注射を打つと1回間違ったら死んじゃうんじゃないですか、こういう施設ができる前に、ほとんどフランクフルトだけ、中央駅のお手洗いの中で1年間で300人亡くなったんです。最後の目的はそういう人たちを職場、社会に復帰させるために教育訓練させることです。

○水谷議員 いわゆる社会的に復帰させるために、公営の団体があるというふうに認識していいですか。

○説明者 そうです。

○水谷議員 それから仕事をさせるという、最後の目的があるということですね。

○説明者 こちらの哲学、目標、最後の目的は、やっぱり社会復帰です。

運営についてですが、例えば、朝、ここに入ってきたとき、健康保険に入っているのか聞きます、もし入っていない場合は、こちらから市役所まで行かなくちゃいけない。証明書をもって、それで注射代を市からいただくんです。市の負担になります。

○西議員 州じゃなくて市ですか。

○説明者 フランクフルト市。ドイツの場合、すべての生活保護は、市の方の負担になります。運営のお金の15%はヘッセン州から、85%は市の負担になります。

それでは、予防の話をいたします。

1990年まで学校の方、麻薬について簡単な説明がありまして、背景が、すごく怖い感じがしたんです。使ったら、もうすごい問題になりますから。恐ろしい雰囲気だったんですよ。気をつけてくださいと。

そのとき、やっぱりまちの中にポスターを貼ったり、テレビでの注意をしていました。けれども、その目的は、理解のためにです。けれども、効果はあんまりなかったんです。

連邦の政府の関係ですが3年間の間、世界じゅう、各国から療法についての研究のレポート集めて、分析して、それで1993年から新しい企画をつくったんです。そうすると、麻薬についての考え方は逆になりました。

療法については、2つの分野があります。まず、新しい方法、直接本人と話しなくちゃいけない。指導のことや説明のこと。けれども、1993年まで、周りのことはあんまり考えてなかったです。家族のこと、経済のこと、失業者のこと、本人の周りのことです。それで、例えば、直接の指導の中、大きな役割はやはりスポーツです。いい指導があったら、強くなるんじゃないですか。やっぱりその周りのことを考えなくちゃいけない。

例えば幼稚園の中、おもしろいことがあります。子どもたち、よくおもちゃを使うじゃないですか。それで、1人の子どもの好きなおもちゃを取ってしまうんです。もうおもちゃが